

第3章 5歳児後期の教育

1 幼児の「遊び」の中に見える「学び」の芽

(1) 「遊び」の中にある「学び」

幼児の「遊び」と児童生徒の「学び」等の違いがとりざたされるが、両者について下記のように定義してみたいと思う。

「学び」とは、これまで経験し理解してきたことが、何らかのきっかけから、興味や注意を向けてかかわることになり、新たな面や新たな関係に気付き、これまで理解し身に付けていたことと新たな気付きがつながり、理解が広がり深まる過程であり、それによって新たなやり方ができるようになっていく過程である。すなわち、「学び」は、生涯にわたっており、幼児期においてもこの学びの過程は共通するものである。

「遊び」とは、遊び自体が目的であり、その遊びを通じて何よりも精神の集中と興奮が体験でき、誰かに指示されて行うのではなく、自分の選択で自主的、自治的に行うものである。

子どもは、「遊び」に夢中になると、次のような行動を見せる。

- 「へえー」「あれ？」等と様々な感覚を通して新たなことに気付く。
- 「こんなふうにしてみたい」「あんなふうになってみたい」といった思いを持つ。
- 「～かもしれない」「～してみよう」と子どもなりに考え、試し、かかわる。
- うまくいかなかった時には、「もっとこうしてみよう」と更に工夫し、自分の予想や発想を実現できるように表現する。

このようにして、「やっぱりそうだった」「～だから～なんだ」と納得して満足感や充実感を得ていくのである。その子どもなりのやり方、ペースやテンポによって繰り返しいろいろ試し、その試す過程自体を楽しみ、その過程を通して友達や保育者とかかわっていくのであり、ここに「学び」があると言える。

だからこそ、幼稚園や保育所等における遊びにおいては、子どもの成長とともに、上記のような物事への気付きや思いを持ち、そこから考え、試し、工夫し、様々な形で表現していく過程を大切にする質の高い遊びが求められる。このような過程が自ら課題を探究し解決していくことの芽生えであり、すなわち小学校以降の学習の芽生えと言える。

(2) 人との「かかわり」から学びの芽が育まれる

遊びにおける学びのプロセスをいくつかの事例から考えてみたい。

＜事例1＞ 「どうしてこっちに水がたまるの？」(3歳児 9月)

砂遊びをしていた5人の男児たち。思い思いに穴を掘ったり、山を作ったりしていた。そこへ、1人の男児がペットボトルに組んできた水を砂山の頂上から流した。「川だ。」と大喜びの男児たちは「もっと水をかけよう。」と言って、他の2人がペットボトルやじょうろを手にして水を汲みに行く。何度か水をかけているうちに山は崩れたが、ある一定の方向に水が流れて掘った穴に少したまった。すると「こっちの方(穴)にばかり水がたまった！」と1人の男児が言い出す。「もっと水を持ってこよう。」と言ってまた何人か水を汲んできて、山があったところから水を流す。「どうしてこっちの方にばかり水が行くのかな？」との声。すると「こっちの穴のほうがそっち(山のあったところ)より低いからじゃないのかな。」とある男児の返答。「へえー、低いからなんだ。」と周囲の男児たち。その後、5人が交代で水を汲みに行き、何度もその水の流れ方をじっと見つめる姿が見られた。

子どもの心情的な内面の変容を中心に、人とのかかわりという視点からこの事例の学びを見てみると、次のようなプロセスが見えてくる。

- どうして一定の方向にばかり水が動くのかと友達の疑問に 「心が動く」
- 再び水を流して 友達と 「やってみる」
- 高い所から低い所に水は自然に動くことを 友達と 「『なるほど』とわかる」
- 交代で何度も水を汲みに行って流してみようことを 友達と一緒に 「繰り返す」
- 高いところから低い方へと水が動くことを 「『やっぱり』と納得する」
- 次の生活や遊びに生かしていく

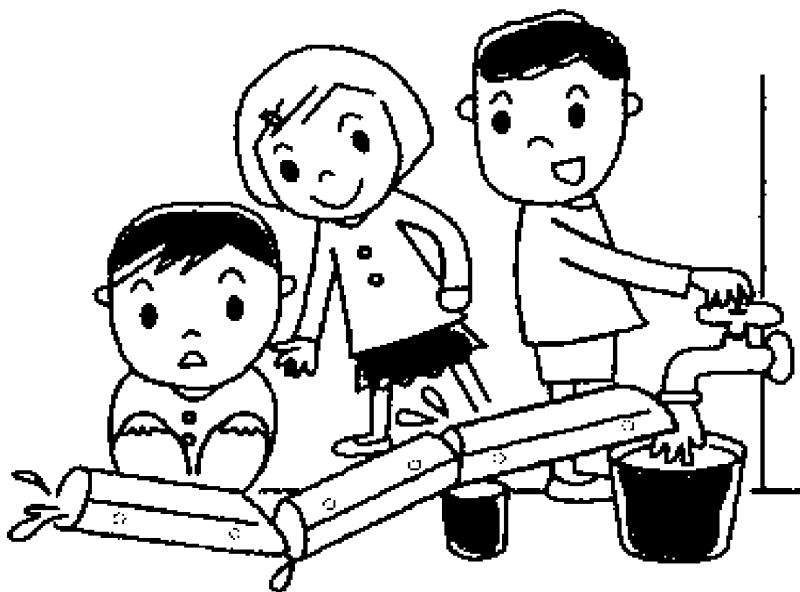
この〈事例 1〉のように、集団生活において他者の存在が子どもの学びに大きく影響し、人とのかかわりにおいて学ぶことは非常に重要である。

（３）幼児の知的好奇心が学びの芽を育む

＜事例 2－①＞「うまく水が流れないよ」（４歳児 ７月）

テラスの水道蛇口から砂場の穴まで水を流そうと、雨樋を並べ始めた３人の男児たち。蛇口から穴までは、５～６ｍはあるが、雨樋は、どれも１ｍ未満の長さのものであった。しかも、蛇口の高さは５０ｃｍほどであり、砂場との高低差はあまりない。男児たちは、初めは雨樋を地面にいくつもつなぐだけであったので、水が途中で

までしか行かず、雨樋のつなぎ目から漏れてしまう。すると、「こっちを高くするといいんじゃないか。」という声。そこで、高低差をつけようとコンテナケース、バケツ、カップ、ふるいなどなどいつも砂遊びで用いているものを使い始める。３人の男児の活気に誘われてか、何人かが集まるようになり、６～７人ほどでその遊びが繰り返される。



「水出すよ!」「いいよ。」「あれ、うまく流れないな。」「あっ! 崩れてしまった。」と子どもたちの声が響く。

この遊びは、子どもたち自身によって始まり、興味や関心を持った子どもたちが自然に集まってきて遊びが展開していった。そして、それぞれが、試行錯誤しながら雨樋をつなげて行くが、その遊びにかかわっている子どもたちの目的はただ一つ、砂の穴に水

を流し入れることである。そこには、砂遊びや外遊びに用いる様々な道具が環境として用意されており、子どもたちは、それらを用いて、なんとか雨樋を伝わらせて水道の蛇口から砂場に水を流そうと工夫するが、装置が壊れるため試行錯誤を繰り返す。この試行錯誤している過程こそが、子どもにとっては楽しい遊びである。蛇口と砂場との高低差があまりないといった条件や、雨樋を支える道具が不安定だったり、水が流れる方に次の雨樋を下にしてつなぐといった工夫が必要だったりなど、子どもたちが思い描くように砂の穴まで水が流れるためには、様々な課題をクリアしなければならないのだ。すなわち、子どもたちは自覚していないその課題を、なんとかクリアするためにいろいろ考えながら試していることが学びなのである。

幼児の内的な知識の変容の視点からこの事例の学びをみると、次のようなプロセスが見えてくる。

好奇心を持ち、能動的、自発的にものに働きかける

⇒ 自分の働きかけに対して生じるものの動きや変化を観察する

⇒ 自分の働きかけと、もとの反応の結び付きに自ら気付く

⇒ いろいろ違った働きかけをする

⇒ 新たなものを発見する

⇒ 内面に受け入れる

この遊びのプロセスを何度も繰り返すことによって、子どもがこれまで持っていた内的な知識の枠組みに変化が生じ、新たな枠組みを作り上げて発達していく。そして、次第に様々な概念を形成し、子どもの内面に受け入れられた知識や経験は、後の知識の源となっていくのである。

（４）学びの芽を育む「保育者の役割」

遊びのプロセスは、遊びの内容、子ども本人、または子どもの集団によって様々であるが、その遊びのプロセスを見取っていくために、保育者には、遊びの内容の分析的な見方とその内容に即した細やかな配慮を伴った援助が求められる。そのためには、次のような保育者の日常の自己研鑽が大切となってくる。

- 日常生活している子どもの姿から、外見だけではなく内面をも理解する力
- 子どもの実態と保育課程や教育課程の両面から考える指導計画を立案する力
- 指導計画立案に伴う教材の研究や環境構成する力
- 保育実践後の子どもの考察（子どもの育ちや遊びの中での学びの考察）と自分自身を省察する力

実は、先ほどの〈事例 2－①〉には続きがあり、ここに保育者が登場する。

＜事例 2－②＞

この様子を見ていた保育者がやってきて、「そのバケツをこっちに持ってきたら？」「ここにはふりを置くといいよ。」などとアドバイスしながら遊びに加わった。すると、子どもたちは、次第にその雨樋から離れていき、結局、その保育者と 2 人の男児のみとなり、最初にこの遊びを始めた 3 人の男児たちは別の遊びを始めていたのだった。

この保育者は、子どもたちの悪戦苦闘する姿をみて、早く子どもたちの思いを叶えてあげたい、その先の遊びを展開して欲しいという思いがあったようである。しかし、保育者が加わったことによって、子どもたちは一番楽しいところを保育者に取られてしまったのである。そのため少しずつ子どもたちはその場から離れてしまったのであった。

この事例にも見られるように、実際の保育においては、遊びが深まるために保育者は次の点に配慮して援助や環境構成をしなければならない。

（保育実践における保育者の配慮）

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・ 子ども自らかかわることができるような動機付けや援助・ 子どもが探究し、試し、工夫し、挑戦することなどが自然にできるような環境構成とプロセスを作り出すような援助・ 遊びの中で子どもたちが何に気付き、何を学んでいるのかを考えた保育の展開・ 遊びの内容が、小学校での学びの内容とどうつながっていくのかを考えていく姿勢 |
|--|

保育者は、遊びを様々な学びの視点から捉えることが求められると同時に、幼児教育等と小学校教育との違いを踏まえなければならない。小学校では、教科ごとにつける力やその内容が決められており、すべての子にその力をつけることをめざしていく。幼児教育等では、意欲・心情・態度を育てることが目標であり、その内容や身につけていく力については、目の前の子どもの実態や活動の様子をもとに柔軟に設定している点が大きな相違点だと言える。

2 「共通の目的による協同的な活動」を大切にした 5 歳児後期の教育

（1）協同性が活動の質を高める～ 5 歳児後期の「遊び」と学びの芽～

幼児期前半は、「同じ場所に一緒にいること」や「同じことをする」ことに大きな意味がある。次第に仲間関係ができてくると、自分の思いやこだわりを積極的に他の子どもに言葉や身体で伝えようとする。うまく相手に伝わらなかったり、相手のイメージを押しつけられたりして嫌な思いもするが、それでもなんとか自分の世界を相手と共有したいと思い、相手に賛同したり、折り合いをつけたりすることを学んでいく。そして、これが自己抑制をしていくことにつながっていくのである。

そして、幼児期後半になると、子どもたちは、一つの目的を共有し、それを実現しようと、協同して遊びや作業を進めていこうとするようになる。

＜事例 3＞ 「じゃあ僕は、コンテナケースをもって来るよ」(5 歳児 10 月)

自分たちの背丈ほどもある砂山を作っていた男児たちが、「この山の向こう側をダムにしよう。」「この山にトンネルを掘ってそのダムに水を流そうよ。」などとイメージをふくらませ、塩ビ管を用いてトンネルを作った。すると、「もっと高いところから水を流してみない?」と女兒が提案をする。「じゃあ僕は、コンテナケースをもって来るよ。」「私は、雨樋をもって来るよ。」「大きいペットボトルもいるよね。」と、必要なものを分担して持ってくる。次々に人が加わり、10 人で大がかりな装置を作る。ようやく完成。「じゃあ水を流すよ。」とリーダー格の子どもが声をかけると、「OK!」と他の子どもたちが応答する。ダムに水が流れ出すと、みんなから拍手が起きた。

この遊びは、これまで砂遊びで培ってきた様々な遊び方を応用し、なおかつ、お互いに言葉を掛け合いながら、自分の役割を考えながら遊びを展開している。5 歳児にもなると、保育者の直接的な援助がなくても、自分たちで工夫しながら協同した遊びを展開していくようになる。



また、この時期の子どもは、自分の思いどおりに振る舞うのではなく、仲間と一緒にルールに従って遊ぶことで、これまではない遊びの楽しさと興奮を味わえることを知らず知らずのうちに理解し始める。そして、次第に自分の思いやこだわりを伝えるだけではなく、仲間とやりとりをしながら、新しいアイディアや遊びのルールを生み出したり、それをお互いに受け入れたりして遊びを発展させていく面白さを経験していく。また、遊びに限らず他の子どものイスを準備したり、他の子どもが育てている植物に水を与えたりなど、生活面においても協同性が育ってくる。相手に感謝されることを自発的に行うのは、自分と他者とがお互いに気持ちよく過ごせる関係を求めているからである。

このようにして、幼児期前半の協同性の芽を育むことで、幼児期後半の協同性が開花し、その協同性の中で、子ども一人一人の自主性と思いやりが育まれていくのである。それゆえ、5 歳児の後期は、この協同性を生かした保育を展開することが可能となり、「一つの目的」を持って活動に取り組む保育も可能となるのである。そこでは、子どものこだわりを保育者が把握したり理解したりしながら、そのこだわりを深めていけるような知的な刺激を与え、なおかつ、子ども同士でその刺激を協同して生かしていけるように援助することが大切になってくる。

（２）共通の目的による協同的な活動を進める～プロジェクト型保育へ～

５歳児後期は、協同性を生かした保育を展開することが可能となり、「一つの目的」を持って活動に取り組む保育も可能となることから、小学校への学習へとつながるプロジェクト学習型の活動を大切にしていきたい。

プロジェクト学習とは、子どもたちが意欲的に自分たちでテーマをもち、時間的には少し離れたところにあるテーマというゴールに向かう学習であり、小学校以降の学習活動において、特に生活科や総合的な学習の時間に行われている。

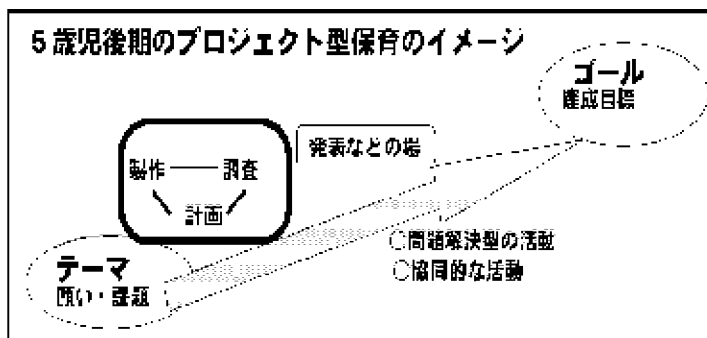
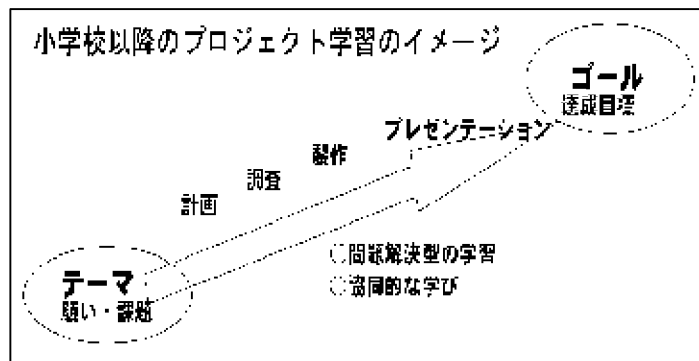
このテーマは、子どもたち自らが問題意識や興味・関心をもって見出すものである。ゴールに向かうために、「何のために、何をやりたいのか」という意識を子どもたち自身が自覚して、計画を立て、友達と協力しながら調査や試行錯誤的な活動を行い、目的を達成していくものである。

５歳児後期にもこのようなプロジェクト学習型の活動（プロジェクト型保育）を取り入れていきたい。５歳児の場合は、保育者の援助のもとで、共通の目的や挑戦的な課題などの一つのテーマを創り出し、友達同士で協力したり工夫したりしながら繰り返しチャレンジして解決していく活動である。

例えば、劇遊びで学級みんなが大好きな「ピーターパン」をやろう、ということが決まったとする。協同的な活動への高まりがある学級集団においては、子どもたちから、「ここで海賊フック隊長の声はこんな声がいいよ。」「こんな船にしたらどうかな。」「ここにこんな大砲をつくろう。」などと、劇を創り上げていくアイデアが次々と出てくる。保育者は、その日の活動場面を設定したり、子どもたちが相談し合える場を設定したりして、子どもの活動や表現をうまく取り入れてせりふや動きをまとめていくことになる。

「～をしよう」という取り組みの課題やそれを実現させる形ややり方を、保育者が全て用意してそこに子どもたちを向かわせるのではなく、子どもたちの思いと保育者の思い、子どもと子どもの思いをつなぎ合わせながらつくり出していくことが大切である。

２６頁から紹介する３つの実践事例、「レッツ チャレンジ～運動遊びから発表会へ」「ぼくらのステージ『水の大冒険』」「なぞなぞ野菜かるたをつくって遊ぼう」は、５歳児後期に共通のテーマを創り出し、友達同士の協同的な活動で目的を達成し、その過程の中で子どもの自主性と思いやりを育てていったものである。



3 5歳児後期のカリキュラム

(1) 幼児教育等におけるカリキュラム

幼稚園教育要領及び保育所保育指針では、子どもの発達の側面から、「健康」、「人間関係」、「環境」、「言葉」、「表現」の5つの領域にまとめ、領域ごとに幼稚園や保育所等の修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる“心情”“意欲”“態度”の「ねらい」と、その「ねらい」を達成するために指導する事項の「内容」が示されている。

各領域の「ねらい」が総合的に達成されるように、各幼稚園や保育所等における教育目標も受けながら、入園・入所から修了に至るまでの期間の子どもの「発達過程」を踏まえて、長期的な視点に立ち、一人一人の発達の筋道を各園の実態に合わせた具体的な「ねらい」と「内容」で組織したものが、幼児教育等におけるカリキュラム（幼稚園においては教育課程、保育所においては保育課程）である。そして、その教育目標は「遊び」の中で総合的に達成されるもので、ある特定の活動と直結させて達成を図るものではない点において、小学校以上の学校教育における教科学習による教育とは異なるため、カリキュラムのとらえ方も大きく異なるのである。

(参考資料・・・幼稚園教育課程 11期・12期)

月	10	11	12	1	2	3
期	11期			12期		
幼児の姿	◎友達と見通しや目当てを持って取り組む時期			◎友達と協力し合い活動を展開していく時期		
ねらい	・友達と考えを出し合って創意工夫した遊びを展開しようとする ・自分の思いを友達に分かるように伝えようとする ・思いが通じ合わない時に自分達で解決しようとする ・友達の良さに気づき一緒に遊ぼうとする ・見通しや目当てを持ち継続し活動を楽しもうとする			・友達関係が深まりお互いのよさを認め合いながら、活動を共にしようとする ・自分が考えたことを積極的に表現しようとする ・地域の様々な人々への関心が高まり親しみを持ってかわろうとする ・就学に期待を持ち様々な事象へ興味関心が高まる		
内容	○自分なりの見通しやめあてを持って、遊びに取り組むようになる ○友達と役割を分担したり、協力したりして遊びを進めるようになる			○友達と刺激し合い、新しいことに挑戦したり工夫したりして遊ぶ楽しさを知るようになる ○共通の目的に向かって、共に活動を進め、友達との心のつながりを深めるようになる		
内容	●友達と役割を分担したり相談したりしながら遊ぶ ●友達と関わる中で自分なりの見通しを持って遊ぶ ●周辺の身近な人々との交流を通して親しみを感じる			●友達と共通の目的に向かって思いを出し合いながら活動を展開する ●一日の流れに見通しを持ち自分達で生活を進める		

(2) 5歳児後期の指導計画

幼児教育等においては、カリキュラム（教育課程・保育課程）に基づいた具体的な実践計画を「指導計画」とよび、「年間指導計画」をはじめ、入園・入所から修了までを発達によって区分した「期」や「月」ごとに作成する長期指導計画と、「週」や「日」ごとに作成する短期指導計画がある。これらの指導計画には、子どもの実態や育ちの様子の読み取り、ねらい、具体的な活動内容、環境構成、援助の方向性等を盛り込み、年齢ごとやクラスごとに作成されるものである。さらには、学年やクラス全体の指導計画だけではなく、その指導計画に基づいて一人一人の子どもの実態に応じたねらいを立てて日々の保育にあたり、記録をとりながら子どもの育ちを丁寧に見取っているのである。

特に5歳児後期においては、協同性を育むために、プロジェクト型の保育も取り入れながら教育課程を作成し指導にあたっている。このような子どもたちの学びが、小学校での生活科等での学びにつながっていくことになる。

(参考資料…長期の指導計画 5歳児 1~3月(12期))

環境の特徴と子どもの実態	- 卒園を前にして5歳児としての自覚がより高まる時期である。 - ある一つのグループの遊びが学級や学年全体の遊びに広がったり、友達とのかかわりが深く強くなったりして、深まりのある遊びに発展するようになる。 - 友達同士励まし合ったり認めあったりする姿が多くみられるようになる。
ねらい	- 友達と刺激し合い、新しいことに挑戦したり工夫したりして遊ぶ楽しさを知るようになる。 - 共通の目的に向かって、共に活動を進め、友達との心のつながりを深めるようになる。
環境構成の重点(◎) 援助の重点(○)	◎一人一人のよさが生かされ友達と目的に向かって活動するような環境を構成する。 ○一人一人が自分らしさを出して活動するようになるために、一人一人の話をよく聞き、気持ちをしっかり受け止めていくようにする。また、活動の中で、友達のよさを認め合い自信につながるような雰囲気作りや環境作りに努める。 ○友達と意見を出し合い、目的に向かって遊びを進めていくようになるために、友達と話し合えるような場の設定や保育室の環境構成を工夫していく。また、グループ内の友達関係を見守りながら、必要に応じて話し方や伝え方も知らせていく。そして、友達と共通の目的が持てるような活動の場を設定したり、お互いの思いを出し合いながら活動を進めていくとする姿を見守ったりする。
予想される活動など	正月遊び(カルタ・すごろく・こま回し 等) 雪や氷などを用いた遊び 節分に関する遊び 体を動かした遊び(すもう・なわとび・雪上サッカー 等) 主な行事…豆まき大会、ひな祭り集会、避難訓練、保育参観、誕生会、卒園式

(参考資料…短期の指導計画<週案> 5歳児 2月第2週)

<先週の子どもの様子> - 気のあった友達関係だけでなく、カレンダー作り、編み物、こま回し、お化けごっこ、ウサギとの活動など、興味関心を持った活動に集まった5~8人の友達とも一緒に遊びを展開していこうとするようになってきているようだ。多くの友達と一緒に遊ぶ楽しさを感じていると共に、友達関係が広がっているようだ。 - カレンダー作りには、興味関心を持った女児たちが飛びついたと言うよりも、新しい遊びを探している子どもたちが飛びついたようである。自分からやりだした子どもの作品は、顔だけでなく体も描いたり周囲の装飾にもリボンを付けたりと、細かなところにも手をかけ丁寧に仕上げており自発的な活動の大切さを実感した。 - 描いたり作ったりすることに抵抗を感じている子どもたちも、何人かの友達の作る様子を見たり、飾った作品を見たりして、作ろうとするようになり「思ったより楽しい」という感想をもらす子どもが多かった。筆やペンでなく、指で描いたり、ちぎって貼ったりする感覚的な活動だったからではないだろうか。				
<今週のねらい> - 目的や課題を持って遊びに取り組もうとする。 - 友達と活動する中で、お互いの良さを知り、それを生かして遊ぼうとする - 友達と力を出し合い、やり遂げた充実感・満足感を味わう。				
<今週の援助の方向> - 卒園に向けて、カレンダー製作をしたり、これまでの園生活を写真などで振り返り「幼稚園の思い出」を写真や言葉等で表したりする活動を遊びの中でも援助していく。その際、場の設定や言葉を引き出す工夫に配慮し、子どもが自分たちで進めているといった実感がもてるようにしていきたい。 - カレンダーの自分の顔製作を中心に援助をする。興味関心を持った子どもたちからの製作になるが、全員が製作する気持ちになるように、時間や場の取り方に配慮する。また、一人一人の細かな作業の様子や、友達とのかかわり、友達の影響力などについても注意深く見ていくようにする。				
2月8日(月)	2月9日(火)	2月10日(水)	2月11日(木)	2月12日(金)
幼稚園の思い出作り・カレンダー作りを中心に			建国記念の日	親子絵本貸出

レッツ チャレンジ ～ 運動遊びから発表会へ ～

1 遊びから発表会に向けた協同活動へ



上の写真は、発表会に向け運動遊びの協同活動に取り組んだ24名の園児の組体操の様子である。運動の得意な子どもも不得意な子どもも協力し合い、支え合いながら練習した成果の姿である。

この幼稚園では、5歳児の後期は小学校への滑らかな移行に配慮し、発表会に向けた取組として協同的な活動を実施している。

何をしたいか自分たちで話し合うこと、自分がしたいことを選択すること、トラブルがあっても仲間と支え合いながら取り組むことを目標にしている。

保育者は、子どもの自主性を尊重し、待ちながらよく見取り、適切な援助ができるように心掛けていった。

活動の流れ

- 1 昨年度の年長組の発表会のビデオを見る。
- 2 何を発表したいか意見を出し合う。
 - * 保育者が子どもたちの意見をまとめる。
 - ① 組体操と運動遊び
 - ② 踊り（ダンス）
 - ③ ディズニー
 - ④ 劇
- 3 出し物を、遊びの中で経験する。
- 4 4つの出し物から1つを選ぶ。（選択）
- 5 発表会に向けて練習する。
- 6 発表する。

2 活動の実際

(1) 昨年度のビデオを見て、子どもと話し合う。



「大きい組さん、かっこいいな。」
「縄跳び、上手だね。」
「跳び箱、6段跳んでるよ。」
「ピラミッドやってみたいな。」
「ぼくは、かっこよく踊りたい。」
「何か作りたい。」
「大きい組さんがやってたピラミッドがしたい。」
「赤ずきんちゃんの劇がしたい。」
「桃太郎の劇がしたい。」

保護者を迎えての発表会をひかえ、子どもたちと去年の発表会のビデオを見た。ビデオを見たあと、子どもたちに発表会で何をやりたいかを尋ね、お互いの意見を出し合う。進んで意見を出す子どももいるが、中には意見を持っていても口に出せない子どももいた。意見の内容よりも、一人一人が自分の意見を言えることをねらいにおき、全員に発表の機会を与えた。放課後、各クラスから出たたくさんの意見を教師間で報告しあった。

(2) 4つの出し物を遊びの中で体験する。

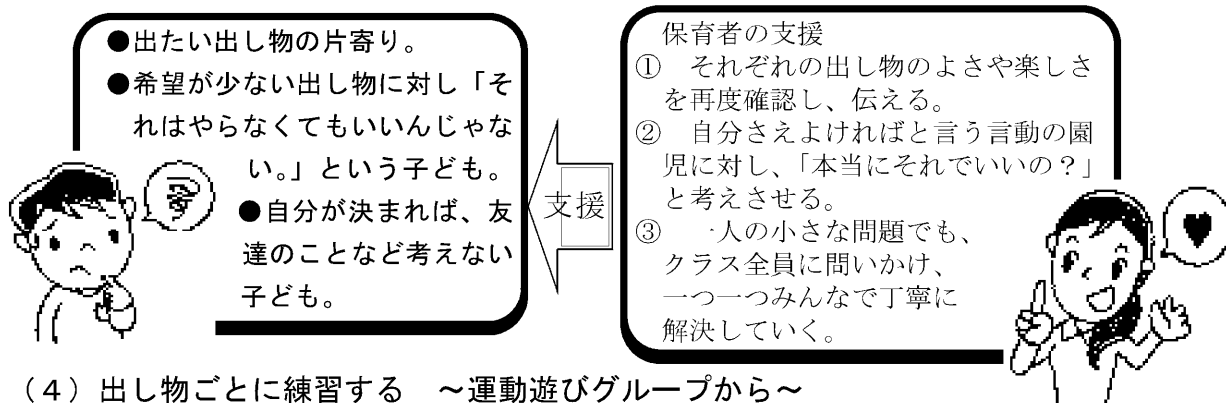


- ・見よう見まねでポーズを決める。
- ・「〇〇君へたくそ。」と非難する子ども。
- ・運動の得意不得意が一緒になるのでトラブルが多い。
- ・トラブルを解決しようとアイディアを出し合い、試行錯誤しながら取り組む。

出し物を大きく4つにしばり、その中から自分がやりたいことを1つ決定するために、それぞれの出し物を全部体験することにした。運動遊びでは、普段の遊びの中で取り組んでいる「鉄棒」「跳び箱」「縄跳び」ではなく、子どもたちがビデオを見て一番興味を持った「組体操」に取り組んだ。最初は見よう見まねで「扇」「はしご」「ブリッジ」「ピラミッド」の中から1つ選び、好きな友達と3人組で挑戦した。組体操を行うにあたって、3人で1つのチームであること、チームのみんなと協力しないと出来ないこと等を知らせた。運動の苦手な子どものいるチームでは、トラブルが起きることもあった。しかし、どうすればうまくいくのかを子どもたち同士で考えたり、順番を変えるなどアイディアを出し合ったりしながら取り組み解決していった。保育者はその様子を見て、それぞれのチームの良いところを紹介したり、励ましの言葉をかけたりして、子どもたちの意欲を高めようとした。

(3) 4つの中から1つの出し物を選ぶ

「選択する」ということは、それ自体子どもの自主性を育むことになるが、自分一人で好きなことをするわけではないので、友達とのかかわりの中で乗り越えていかなければならない困難もある。また、そこには思いやりの芽を大きく育むチャンスも潜んでいる。子どもたちの中で何が問題になっているのかをよく見取りながら、支援を行った。



(4) 出し物ごとに練習する ～運動遊びグループから～

運動遊びには、3クラスから24人の子どもたちが集まった。練習が進むにつれ、更に意欲的に取り組む子どもたちの姿が見られた。



園児の意欲が高まっていく意識の流れ

- ① 「ぼくは跳び箱7段跳ぶぞ。」
「私は、縄跳びだったら、後ろ跳びができるわ。」
「鉄棒の逆上がりをぐるぐる何回もしたいなあ！」
- ② 「少し上手になったところを見せたいなあ。」
「幼稚園に着いたら、すぐに練習しよう。」
「家に帰ったら、ママの背中で跳び箱を跳ぶ練習をしよう。」
- ③ 「ねえ、みんなで一緒に組体操してみない？」
「扇をしよう。」 「やったあ、できた！」
「はしごやピラミッドにも挑戦しよう。」
- ④ 「どうしたら、上手にできるかな？」
「それじゃ、ミキちゃんが前になって。」
「ぼく、大きいから上じゃだめだ。下になるよ。」
- ⑤ 「先生、早く遊戯場に行こう。」
「先生、教えて。」 「先生、カッコいいね。」
「先生、ぼくたちのアイデア見てくれる？」
- ⑥ 「運動するんだから、“準備体操” もしっかりしよう。」
「約束も決めないとね。」
「サトシ君のかけ声で進めよう！」
- ⑦ 「お尻、あと少しだよ。」
「もっと、手を前にするといいよ。」
「やったね。できた！すごいね。」
- ⑧ 「うれしいな！初めてピラミッド成功したね。」
「みんなに見せたい。みんなびっくりするよ！」
「ケンちゃん、きっとできるから、がんばろうよ！」

練習が進むにつれ、子どもたちは進んで保育者にも働きかけるようになった。保育者の方でも子どもの状況を見取りながら必要な援助を行うようにした。子どもたちの「もっと、やりたい！」という意欲が高まった時、登園した子どもたちから自由に運動遊びに取り組めるように、遊戯場の環境設定を工夫した。保育者は見守りながらも適切な援助を心掛けた。保育者を誘ったり、子どもたち同士で遊びに誘い合ったりする姿が見られるようになった。運動遊びを十分に楽しめる時間ができたことで、自分のことだけではなく、友達の取り組む姿を見たり、子どもたち同士で「もう少しだよ。」と声を掛け合うようにもなっていた。自分一人から友達へ、子どもたちの関心が移っていることが見て取れる。共通の目的を持った活動が進むにつれて、互いを思いやる気持ちも高まっていた。

しかし、困難もあった。下記の事例は、子どもに見えた問題と保育者の支援である。

子どもに見えた問題	保育者の援助
① 自分にはできないと決めつけてしまい、自分で運動遊びを選択したにもかかわらず、全く取り組もうとしない。	◇ 「もう一度選んでみる？」と伝え、友達の活動する様子と一緒にしながら、それぞれの活動の楽しさなどについて伝える。その中で、上手にできるかどうかではなく一番楽しそうなものを選んでみるように助言する。
② やる気はあり、跳び方も頭ではわかっているものの、跳べなくて、悲しい気持ちになっている。	◇ しばらくじっと見守り、いつ声をかけるべきなのかそのタイミングを待つ。これ以上待っても自分で気持ちを整理することが難しいと見取った時には、個別にかかわる。できるできないを見取るのではなく、目の前の壁を自分の力で乗り越えるということを大事にしていきたい。
③ 慣れや飽きからか、一つ一つの運動をつなぐ場面にステージを歩いたり、だらだらしたりしている。	◇ 他の子のお手本として取り上げてあげたり、新たな目標をもたせるなどして、取り組むことの楽しさと上手にできている自分っていいなあという実感を持たせる。

3 「チーム」で学ぶ、1つの目的に向かって学ぶことの大切さ

今回の運動遊びはそもそも個人の取組であったが、発表内容の中に組体操を取り入れたことで、「個人の出し物」ではなく「チームとしての出し物」になった。このことで、子どもたちなりに運命共同体のような意識を感じ、練習中に友達同士教え合ったり、注意し合ったりしながら、お互いを刺激し合う様子を見ることができた。

また、普段の遊びを「遊び」で終わらせず、同じ目的に向かう協同的な活動としてとらえ、共通の目的に向かって活動を進めることで、トラブルがあっても解決しようという意欲が見られるようになった。保育者側も、子どもの状況をしっかり見取り、待ちながら、話し合う機会を多くもったり、一人一人の考えや思い、取組をその都度丁寧に理解したりするようにした。その結果、教師が特別に口を挟んだり、直接的なかわりをしたりしなくても、子どもたち同士で考え、教え合い声を掛け合い、互いが自分のことのように成功を喜び合い、自主性と思いやりの心が大きく育まれたように思う。

このような協同的な体験活動は、協同性を育み、小学校教育につながっていくものであると考えている。

ぼくらのステージ「水の大冒険」

～ 体験（米作り・水探検）から表現遊び、そして総合表現活動へ ～

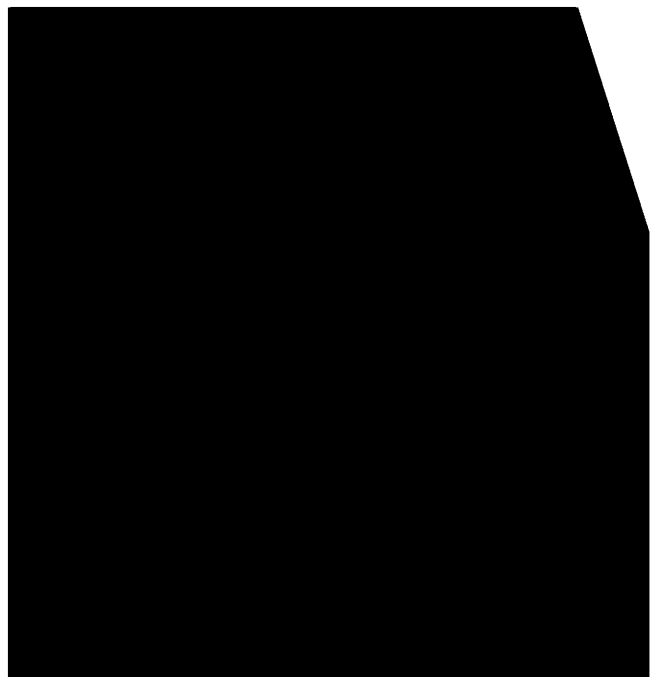
1 総合表現活動「水の大冒険」に込めた願い



上の写真は、地域の産業である米作りを地域の人と一緒に取り組んだ子どもたちが、米作りの活動を通して、稲を育む「水」に関心を持ち、水の探検を通して感じた思いを、身体、音、言葉で精一杯表現している姿である。

この表現活動に込めた願いは、右に示してある担任から保護者にあてたメッセージでもわかるように、日常的な体験活動や遊びの中で一歩ずつ積み重ねてきた子どもたちの力を、「仲間と共に表現をつくる」活動の中で更に高めていきたいというものである。

この保育所では、地域のくらしや仕事、子どもが主体的に自然に働きかける活動を大切にしてきた。そして、その活動が、子どもの日常的な遊びや収穫祭をつくる活動、水の探検とその体験を通じた表現遊び（音・身体・言語）、そして、発表会に向けた総合表現活動へと自然な形で発展していった。子どもの活動が発展していくにつれ、友達同士、保育者と子ども、子どもと地域の人たちのつながりが深まっていった。子どもの自主性や思いやりの芽はこのような活動の中で育まれていくと考えている。



2 総合表現「ぼくらのステージ『水の大冒険』」ができるまで

(1) 米作り体験活動（地域の仕事を地域の人と共に）

○ 米作りの活動は2年目。病気になったり雀に食べられたりすると、収穫量も減ってしまう。それでも、もみすり、精米を丁寧に丁寧にし、一粒の米の大切さを感じ取ることができた。



【田植え】
「ぬるぬる水いっぱい。」



【稲刈り】
「稲って米ののいがする。」



【もみすり】
「プリンカップでお米を育てるぞ。」



収穫の喜びを大黒舞で表現する子どもたち

(2) 水の探検

○ 田んぼに入ってくる大切な水はどこで生まれるのか？その水はどこに流れていくのか？ その行方を探しに、子どもたちは毎日探検に出かけ、そこでいろいろなことを発見し感じてきた。



【水の源泉】
「プクプクして雨さんと遊んでいる。」



【流れる水】
「こんな所を流れているんだ。」



【堰・用水路】
「これは、田んぼに水が行くように作った川だよ。」



【田んぼへ】
「やっと、田んぼに…。長い旅だったね。」

(3) 表現遊びから総合表現活動「ぼくらのステージ『水の大冒険』」へ

○ 水の探検をした子どもたちは、そこで見たこと、触ったこと、感じたことを楽しく表現する。子どもの内なる表現を引き出したものは「音」であった。音と共に豊かな表現が生まれ、体験をもとに創った絵本が脚本になって、総合表現「水の大冒険」が生まれた。

ー表現遊びの世界ー



水の探検と「音」を一緒にし、感じたままに表現する子どもたち



表現で使用する布を染めている子どもたち



水の探検の絵本作りへ
これが、脚本へ



3 活動の中での子どもの育ち

(1) 集団での遊びが子どもの自主性と思いやりを育む

◇絵本の好きな子どもが絵本による脚本づくりへ

水の探検をした子どもたちは、その時に知ったこと、感じたこと、思ったことを絵に描く。絵の中には、言葉も入れていく。

「プクプク、プクプク、水が出ている。」

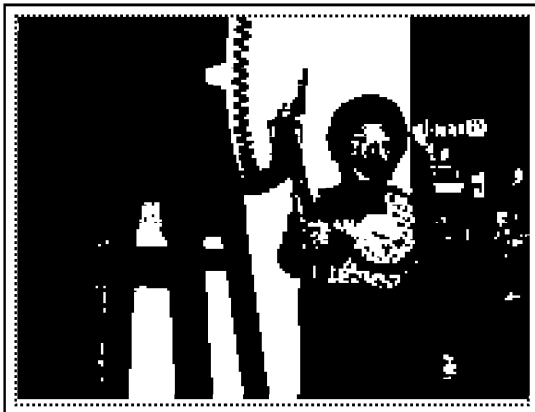
「わあい、滑り台みたいに流れている。」

絵本の好きな子どもは、どんどん絵のお話を創り上げていく。

下の脚本は、こんな子どもたちの絵や言葉をもとにして創り上げたものである。だから、原作は子どもたちなのだ。



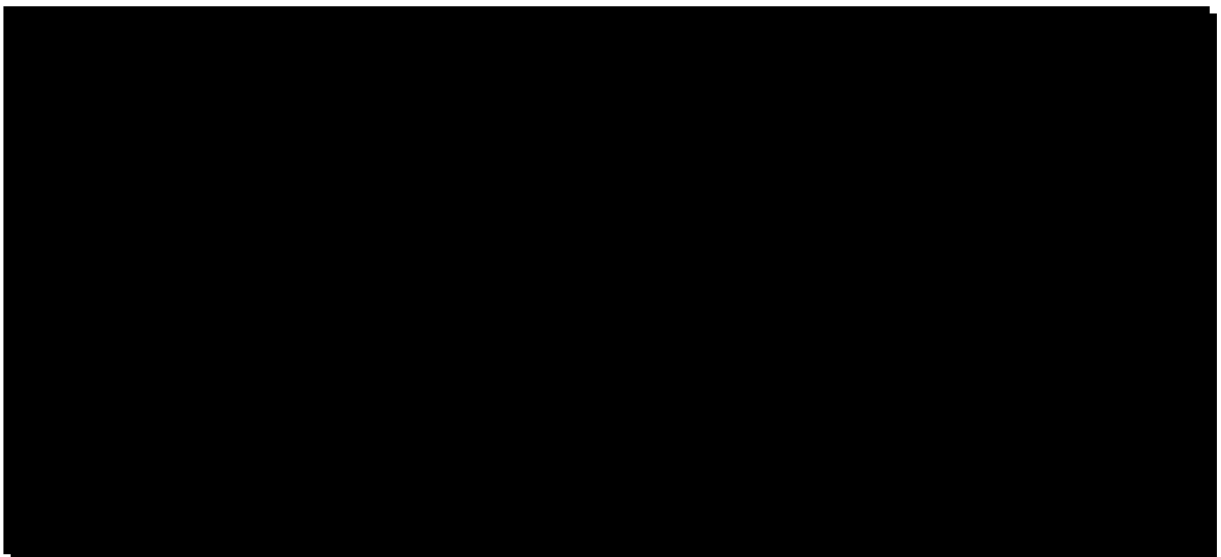
◇「ぼくは太鼓が大好き」ケンちゃんの素敵な表現



ケンちゃんは太鼓が大好き。たくさんの楽器があっても太鼓から離れない。そんなケンちゃんのことをお友達をよくわかっている。誰もケンちゃんからバチを取りあげたりしない。それどころか、ケンちゃんが太鼓を打つと、それに反応して動き出す。

歩いたり、走ったり、太鼓の音がずっとけると、動きもずっとけたり……。

ケンちゃんとお友達が、あうんの呼吸で響き合う。



◇音の世界が子どもの表現意欲と豊かな動きを引き出す



ステージ上では、男の子2人が小太鼓を打っている。その音に子どもたちが豊かに反応する。

子どもたちは、遊びの中でいろんな楽器を使って音遊びをした。そんな音遊びをしているお友達のそばで、自由に身体を動かす子どもたちがいる。

保育者が入って、「今の太鼓の音を聞いてのミキちゃんの動き、おもしろいね。みんなでまねっこだ。」

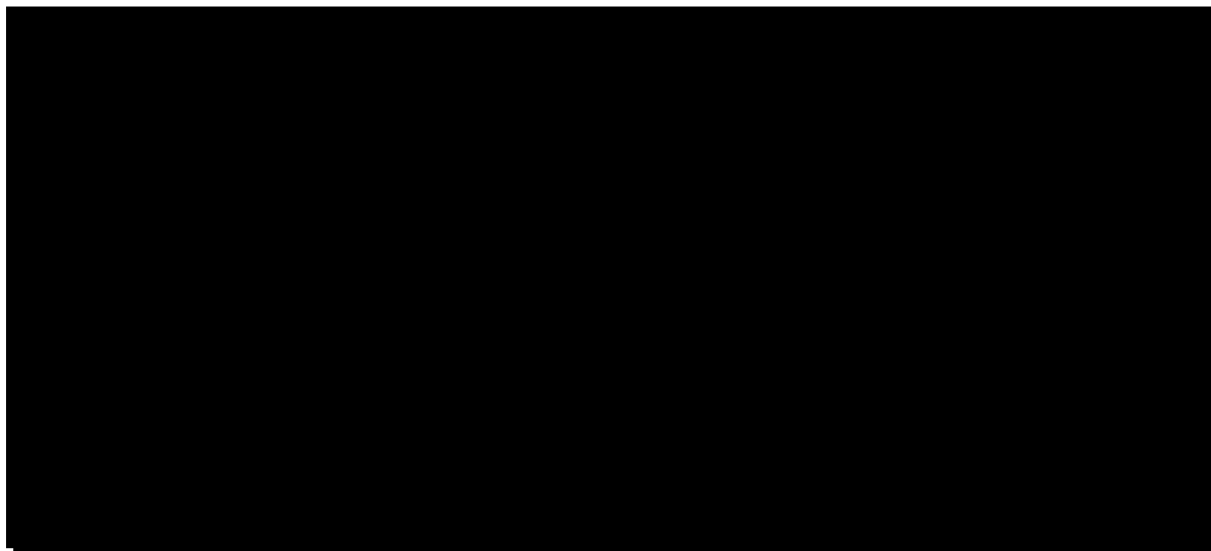
「ねえ、サトシ君、もう一度、さっきのようにたたいて…」

動きのまねっこ遊びが始まった。1人、2人、3人、…。いつのまにかたくさんのお友達が集まって、滝を流れる水の表現の完成である。

4 総合表現活動での教師の役割

総合表現活動を構成する上で大切なことは、子どもの日常的な体験や遊びを生かすことである。幼児の場合のテーマ学習は「～つくって発表する」ということが多くなると思うが、子どもの意欲と豊かな表現を支えるものは、子どもの遊びや体験である。そして、その遊びや体験が生きるテーマ学習を構成するのが教師の役割である。

また、みんなが同じ目的に向かって活動することになるので「その子なりに自由に遊ぶ」ということはできないわけで、これまで以上に子どもの見取りと集団における個の生かし方が大切になってくる。



なぞなぞ野菜かるたをつくって遊ぼう

～ 体験から伝えたい表現へ ～

1 文字で楽しむ子どもたち



「白くてブロッコリーみたいな野菜は、なあに？」

「もこもこしているところが似てるから、カリフラワー。」

「あたりです。」

カリフラワーチームが、自分たちが育てた野菜のなぞなぞかるたを、みんなに元気いっぱいに紹介している。絵札は、チームの仲間と協力してちぎり絵で完成させている。

この活動では、まず、野菜づくりを通して、発見する喜びを実感させることをねらいとしている。保育者としては、発見の喜びを「なぞなぞ野菜かるた」で表現させたいという思いをもちながら、子どもたちの思いや願いをもとに、活動を進めていきたいと考えていた。

・・・ 活動の流れ・・・

- 1 自分たちで野菜を育ててみよう
- 2 野菜の葉っぱを描いてみよう
- 3 野菜のことをもっとよく知ろう
- 4 どうなってるの こうなってるの
- 5 なぞなぞ野菜かるたをつくろう
- 6 収穫した野菜を食べよう



2 活動の実際

(1) 野菜づくりを通して、さまざまな発見をしていく子どもたち



「うわあ、ハートの葉っぱが出てきた。」

「トマトって、下から赤くなってくるんだね。」

「ピーマンって、ぴかぴかに光っている。」

「キャベツを横に切ると、木みたいに見えるんだよ。」



子どもたちにとって、野菜づくりは発見と感動の連続であった。保育室前の「はっけん！はっけん！コーナー」は、子どもたちの発見でいっぱいになった。絵で描いたもの、文字を使って書いたもの、発見したことを先生に文字にしてもらったものなど、様式はさまざま。初めは野菜への興味・関心があまり高くなかった子どもも、野菜が苦手な子どもも、育てている野菜に触れたり、においをかいだりと、本物に触れる体験をしていく中で、野菜づくりに夢中になっていった。担任は、「発見したことを、なぜなぜかのためにしたら楽しそうだね」と、活動を始めるにあたって思い描いていたことを子どもたちに投げかけてみた。

(2) 発見を「なぜなぜ野菜かるた」で表現する子どもたち



きいてくんが
しんてれいの
なるわすいは
いたそ
かぼちや

「半分に切ると、木みたいになっている野菜はなあに。(答え：キャベツ)」

「細長いお家に入っているつぶつぶちゃん、なあに。(答え：えだまめ)」

「ぼくは、ちぎり絵で本物みたいなとうもろこしをつくるんだ。」



「おもしろそう！」「やってみたい！」子どもたちは、なぜなぜ野菜かるたづくりに大賛成であった。子どもたちは、野菜づくりをしてきた中で発見したことを振り返り、友達と話し合いながら、どんなことをなぜなぜにしようかと考えていた。できあがったな

ぞなぞには、野菜の形や色、味など、これまで子どもたちが発見したこと、感じたことがたくさんつまっていた。

グループの友達と協力しながら、絵札になるちぎり絵づくりをがんばる子ども、読み札づくりをがんばる子どもなど、自分の得意なことを活かし、グループの友達と力を合わせながら、なぞなぞ野菜かるたづくりが行われた。



「なぞなぞ野菜かるた」をつくる



「なぞなぞ野菜かるた」で遊ぶ

(3) 伝えたい思いをはぐくむことの大切さ

今回の「なぞなぞ野菜かるた」づくりの活動で、大切にしていたことは、子どもたちに、感動につながる豊かな体験をさせることであった。子どもたちは、野菜づくりを通して、見て、触れて、感じながら、野菜が日々成長していくことの喜びを感じていた。絵の得意な子どもは自分の発見を絵で表現し、文字を書くことが得意な子どもは文字で表現する。全員が正しく文字を書いて表現することをねらっている活動ではない。自分が発見したことを、文字で表したくて、初めてひらがなを書いた子どももいた。もちろん初めから正しく書けているわけではない。左右逆になっても、点が足りなくても、伝えたいという思いが高まっていることを、子どもたちの育ちであると捉えていきたい。

「伝えたいという思いをはぐくむ豊かな体験活動を大切にしています。」

「子どもたちが文字のようなものを使って、自分の発見を表したかったんだという思いを大事にしています。」



3 文字や数への興味・関心を高める

(1) 環境構成の工夫

子どもたちが文字や数への興味・関心を高め、遊びの中で、文字や数を使って表したいという思いを引き出していくためには、普段の幼稚園生活の中で、文字や数に自然に親しめる環境構成を工夫していくことが大切である。具体的には、次のような環境構成の工夫が考えられる。

◇自分で判断して生活できるようにするための環境構成



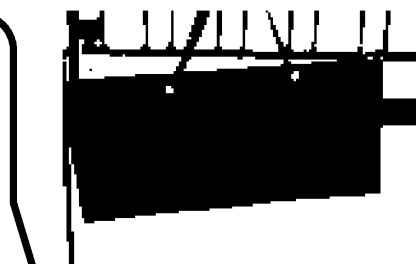
「子どもたちが使う道具箱に、絵だけでなく文字や数字を表示しています。」

※ 使った物を自分で片付けながら、文字や数字の役割にも目を向けるようになりました。



「いくつ重ねて片付けるのか、数字とシールで表示しています。時々重ねる個数を変えています。」

※ 重ねる個数が時々変わるので、子どもたちはシールの数や数字を注意深く見るようになりました。



◇遊びの中で文字や数に自然に触れられるようにするための環境構成



「階段に“しりとりカード”、棚に“文字の書かれている板”を何気なく置いてあります。使い方は子どもたち次第です。」

※ 遊びの中で自然に文字や数字に親しんでいます。



(2) 自立という面での育ちを大切に

幼稚園では、自立という面での育ちを大切にし、自己判断させるチャンス子どもたちに与えることを意識して、子どもたちとかかわっていくことも必要である。そのような園での生活の中で、子どもたちは自然に文字や数に触れ、日常生活の中で文字や記号の機能に気付き、親しんでいく。文字や数の果たす機能と役割に対する関心と理解が、できるだけ自然な形で育っていくような環境構成に配慮していきたい。